

奈良敏行+田中淳一郎共著「街の本屋はねむらない」（1997年 アルメディア刊）という本があります。リードに「地域社会って何なのか、その中に生きる街（町）の普通の本屋って何なのか——二十一世紀に必ず生き残るであろう二つの書店現場です」とあります。この本の最初に「町の本屋という物語」を語っている奈良敏行さんのお店が、鳥取にある定有堂書店です。駅前通りをちょっと街中に行った路面店です。1980年に元郵便局員だった店主の奈良さんが開店しました。開店した時には周辺には24軒の書店がありましたが、今では2軒になっています。このお店は書店員の「聖地」と言われ、書店開業を目指す人、書店員として働きたい人の憧れで、40年営業してきましたが、店主・奈良さんの高齢化と体調不調に伴い、今年に閉じる決断をされたそうです。引き継いでくれる方を探したそうですが、いままで創ってきた特色や本屋さんとしての佇まいを体現できる方はいなかったようです。元書店員だった友人は言います。「あれだけメッセージ性の強いお店を作ると、それはもう個性さえも通り越して、おそらく誰もがあの枠に入ることは不可能というか、そもそも誰かに…と考えることが不毛です。奈良さんに始まり、奈良さんで気持ちよく終わるのが宿命かと思います」と。言うことはわかるのですが、本当に残念至極です。定有堂さんは、一点だけですが出版もやっていて当社扱いで流通しています。これは当分継続して扱います。

濱崎洋三 『伝えたいこと』 定有堂書店

地方・小出版流通センター 扱い

価格：3,080円（本体：2,800円＋税）

ISBNコード 9784812306109